Title	巻頭言　研究と教育の分離
Author(s)	大木，雅夫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.13-4, 2004.3 : 3-3
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4363
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

巻頭言

研究と教育の分離

かつて研究と教育が密接不可分のものと考えられていた時代があった。私自身は、それを旧弊な考え方とは思わない。むしろ大学でもこの頃は教育偏重の傾向があり、採用人事に際して、この大学では研究しようなどと思うななどと公言する者も現れているようである。今頃になってこのようなことを揚言するのは、思わざるも甚だしいではないか。古来、大学は教育機関だったからである。ヨーロッパ諸国では、一般に研究の担い手は、大学以外のアカデミーとか独立の研究所、あるいは私立の施設であった。豊かな国ではそれでやっていけた。しかし小国分立の貧しいドイツではできない。19世紀初頭の敗戦国プロイセンは、富国強兵を目指して大学改組に踏み切った。研究室はじめ付属病院や実験室等の研究施設が学内に設けられ、飛躍的にあがった研究成果がプロイセンの政治的・経済的、そして軍事的脆弱さを補強した。発明が相次ぎ、技術革新に連なった。

20世紀に入って、またしても敗戦国となったドイツは、今度は研究所の充実にのりだした。かつてのカイザー・ヴィルヘルム研究所は、マックス・プランク研究所に発展した。これは現在学問の全分野にわたって50以上あると思う。私の留学先は、ハンブルク大学ではなくて、そこから徒歩7分ほどの所にあるマックス・プランク外国私法国際私法研究所であった。そこでは研究員に講義や教育の義務を課していない。その研究所にはいかにも大志を抱く少壮研究者が集まっていた。教育と研究とを結びつけてきたドイツが、その上さらに完備した研究機関を整備していたちょうどその頃、日本では文教予算をばらまいて、設備も整わない大学を至る所に創設していた。どちらの行き方が優れているかは、長い目で見なくてはなるまいと思うが、最近のように過度と思えるほどの教育重視はいかがなものであろうか。

教育重視と研究軽視の風潮は、さらに弊害をもたらしている。そこそこの研究さえ積んでいれば、大学教授たる者は何でも教えられるようでなくてはならないという過大な要求と短絡しがちだからである。もちろんこの要求をまったく「不当」だというつもりはない。法学についていえば、民法と商法は本質的に取引法であり、憲法と地方自治法とか刑法と刑事訴訟法も内容的に交錯せざるを得ないから、それぞれ一人の教授が教えてよいはずである。ドイツやフランスの法学者たちを見ても、そのレパートリーの広さには目を見張るべきものがある。しかしわが国の法学者は、よく言えば一国一城の主といえようが、数個の城を抱え込むだけの器量は遺憾ながら持ち合わせていないのではないか。もちろん、かくいう私自身、何でもやれといわれたらたまらない。

日本の学問は圧倒的に輸入学問であった。日本からの「発信」は必要であろうが、学問の輸入大国であることは決して恥ずべきことではない。菅原道真は、遣唐使に任ぜられながら「唐に学ぶものなし」などと口実を設けてその任を免れ、その後の日中文化交流は途絶えた。なぜこの人物が学問の神様なのか、私にはわからない。その点では新井白石の方がはるかに適格者ではないか。迫害時代の日本に来て逮捕されたイエズス会士シドッチをかくまい、西洋事情を聞き書きして『西洋紀聞』をまとめ上げた新井白石の方が天神様よりもはるかに上である。このところ学問の世界でドイツやフランスに対する研究は昔日の面影を失ったが、そこには今なお限りなく学ぶべきものはある。多くの研究者が分担してでも宝の山を崩してゆかなければ、日本の学問は貧困化の道をたどるのではないか。分担し分業して、まさに専門的研究が蓄積されなければならないであろう。

専門的研究の蓄積と深化とその総合こそ学問の進歩をもたらすものであり、それが教育に跳ね返れば、これに越したことはあるまい。18世紀フランスのアンシクロペディストは、あらゆる分野の専門的学者はもとより、靴下製造業者、絹加工業者、時計製造業者、ビール醸造業者等、あらゆる専門職人まで執筆に参加させた。それらの専門的な、ある意味では職人的な知識獲得の努力が全体として学問の急速な進歩をもたらし、知の力を最大限に培ったといえる。ドイツのマックス・プランク研究所のような高いレベルの研究機関があればよいと思うが、一朝一夕にはできないなら、わが国ではどうしても大学が研究と教育の双方を担わなければなるまい。日本の大学人は、そもそも過重な負担を担うように運命づけられており、最初からそれを覚悟しなければならないのかもしれない。

聖学院大学大学院政治政策学研究科長・教授　　大木雅夫